

百合子さんの遠足のお話

武 田 雪 夫

さあ、これは、百合子さんの遠足のお話ですよ。

まあ、今日の日曜日は何てよいお天気でせう。それでは、みんなで遠足に行きませう。百合子さんは、お父さまとお母さまと三人で、遠足に出かけることになりました。

お母さまも、ねえやさんが、大いそぎで、お辨當をたくさん作りました。それから、お水筒にお茶を一ぱい入れました。

さあ、それでは出かけませう。

お辨當がたくさんで、まあ、重いこも、重いこも。それでは、お辨當は、お父さまに持つて行つて頂きませう。

さあ、それでは、百合子さんは、何を持つて行きませう。ああ、さうです、さうです。お茶の入つてゐるお水筒を持つて行きませうよ。赤くてきれいなお水筒です。百合子さんが肩にかけるこ、ほんたうに、よく

似合ひますこと。

それでは、お母さまは、何を持って行きませう。さうさう、昨日、お菓子屋さんから買つて来た、おいしい〜お菓子があります。お母さんは、それをお風呂敷に包んで持ちました。

「行つてまゐります。ねえやさん、しつかりお留守居して下さいよ。」

百合子さんは、さう言つて、お父さまやお母さまの先に立つて、元氣よくこゝろ〜こゝろ〜出かけて行きました。

少し歩いて、乗合自動車にのりました。それから今度は、電車にのりました。

しばらく行つて、その電車から降りるこゝ、もうそこは、すっかり田舎でした。道には、人があまり通つてゐませんから、安心して歩けます。百合子さんとお父さまとお母さまは、その道をぶら〜歩いて行きました。大きな木にまつ赤な實が、一めんになつてゐました。それは柿の木でした。百合子さんは、お猿さんのやうに、する〜こ登つて行かれて、柿の實を取つて食べられるこよいなと思ひました。

それから少し行くこゝ、さこかで、高い高い聲で、何かの鳥が、

「キイ、キイ、キイ……。」と、鳴きました。百合子さんは、びつくりしましたが、何だか頭の中が、スウツミしたやうな氣がしました。お父さまは、あれは、「百舌鳥」^{も。}といふ鳥ですよと教へて下さいました。

それから、道のそばに太い太い木があつて、葉ッばが、すっかり黄色になつてゐました。その黄色い葉ッ

ばは、道の上にも澤山おちてゐました。拾つて見るに、みんなお扇子せんすのやうな形をしてゐました。

百合子さんは、その葉っぱを、五枚も十枚も拾つて、ポケットの中へ入れました。お母さまが、これは「いでふ」の木の葉っぱです、さう言つて教へて下さりました。

そら、百合子さんも、お父さまも、お母さまも、たくさんく歩いたでせう。ですから、みんな、ほんに疲れてしまひました。それに、お腹が、もうペコクになりました。

それでは、どこかでお辨當を食べることにしませう。その邊は、きれいな／＼草原です。

さあ、どこがよいでせう？

あちらの木の下にしませうか？それとも、こちらの土手の上にしませうか？

ああ、あそこあそこの小さな木のかげが、すずしさうでよろしいこと。

さあ、お父さまも、お母さまも、百合子さんも、みんな、お坐りしませう。

はじめに、お父さまが、ドカンと、大きな音をさせてお坐りになりました。さうするに、こんどは、お母さまが、ペタリとやさしい音をさせてお坐りになりました。さうするに、おしまひに、百合子さんが、お父さまとお母さまの前に、コトンとかはいゝ音をさせてお坐りしました。

お父さまが、にこ／＼して、

「さあ、早くお辨當を開けて下さい。」

さう、おつしやいました。

お母さまは、大いそぎでお辨當をお開けになりました。

おやく、おにぎりです。大きなおにぎりさ、中位のおにぎりさ、それから小さなおにぎりさ、たくさんく出て来ました。

大きなおにぎりは、お父さまのです。中位のおにぎりは、お母さまのです。それから、小さなおにぎりは、百合子さんのですね。百合子さんが、「頂きます」をして、おにぎりをわつて見ますさ、まん中に赤い梅干が入つてゐます。日の丸の旗のやうです。お母さまも、おにぎりを割つて見るさ、やつぱり赤い梅干が入つてゐて、日の丸の旗のやうです。それから、お父さまのも、やつぱり同じやうに日の丸の旗のやうでした。

さあ、それでは、よくかんで食べませう。

お父さまも、よくかんで、さつさり食べました。お母さまも、よくかんで、さつさり食べました。百合子さんも、お父さまやお母さまに負けないやうに、よくかんで、さつさり食べました。

そのうちに、お父さまは、お茶がほしくなりました。そら、お茶は、お水筒の中です。そのお水筒は、百合子さんが持つてゐましたね。それで、お父さんは、

「百合子ちゃん、お茶を下さいな。」

さう、おつしやいました。百合子さんは、びつくりして、

「はっい。」とお返事をしました。

だつて、おやぐ、百合子さんは、まだお水筒を肩にかけたまゝでゐたのですもの。百合子さんは、いそいでお水筒を肩からはづすこ、すぐに蓋を取つて、それをお茶わんにして、お茶をついで上げました。トッピンナップ、上手に上手に、少しもこぼさないでつきました。

するこ、お父さまは、

「ああ、おいしい、おいしい。」

さう言つて、二杯も三杯ものみました。

それを見てゐたお母さまは、ご自分ものみたくなつたのでせう。やさしい聲で、

「百合子ちゃん、お茶を下さいな。」

さう、お父さまのお真似まねをして言ひました。

百合子さんは、すぐに、

「はっい。」と、お返しをして、さつきお父さまにして上げたやうに、トッピンぐこ、上手にお母さまに

お茶をついで上げました。

さつきするこ、お母さま、

「まあ、おらしらうか、おらしらうか。」

さう言つて、二杯も三杯もおのみになりました。

そのうちに、百合子さんも、お茶がのみたくなりました。それでは、トッピング〜ミ上手についでのみませう。

「まあ、おいしいこと、おいしいことだ。」

みんな、お辨當が、すみましたら、少しの間、しづかにして休んでゐました。

それから、百合子さんは、お父さまやお母さまを、かくれんぼをして遊びました。でも、お父さまは、體が、大きいので、どこへかくれても、すぐに見つかつてしまひます。それで、お父さまは、いつも、鬼になつてばかりゐました。

それで、こんどは、鬼ごっこをして遊びました。でも、お母さまは、かけるごっこが一番おそいので、すぐにかまつてしまひます。それで、お母さまは、いつも、鬼になつてばかりゐました。

そのうちに三時になりましたから、また、さつきに飯を食へたころへ坐つて、こんどはお母さまの持つて來たお菓子を、みんなで食へました。そして、お茶のみました。ああ、おいしいこと、ああ、おいしいことだ。

その時、お父さまが、おつしやいました。

「まあ、もう、そろ〜歸りませう。夕やけ小やけで日がくれて、まつ暗にならないうちに歸りませう。」

すむら、お母さまもおしやりました。

「ええ、さうしませう。ねえやも、ひきりた、きつた、さびしがつてゐるたせう。」

そらく、歸るお仕度です。お父さまとお母さまは、お荷物を持ちました。百合子さんは、お水筒を肩にかけました。

さあ、いそいで歸りませう。

百合子さんは、元氣よく、すん／＼歩いて行きました。

そら、お水筒のお茶は、みんなしてのみましたね。ですから、もう、ほんたうに少ししか残つてゐません。

そのお茶が、百合子さんの歩くたびに水筒の中でゆれて、ピチャ／＼ロン／＼、ピチャ／＼ロン／＼と、それは／＼かはい／＼音をたてました。

こんどは、餘り歩かないやうに、他の電事に乗つて、お家へかへりました。

百合子さんが、

「唯今、ああ、くたびれたこと。」

さう言つて、お水筒を肩からはづして、お玄関のまごころに置きました。するど、お水筒の中で、お茶の音が、ピチャンといひました。きつと、お水筒の中のお茶も、つかれたので、「あつつかれた」と言つたのでせう。

はい、それでは、この百合子さんの遠足のお話は、これでおしまひです。